茶乃ゝ露

蔵 12
881
27

常夏 第四並

巻名 花ハ朝顔なる為に此前栽に常夏をうゑ置し事也 [illegible]
二ある也 哥に なてしこのとこなつかしき色を見は
もとのかきねを人やたつねん 源氏卅六歳の六月よりあり 又
[illegible]のありさま也 細 此哥の為 巻名 [illegible]也 源氏卅六乃
夏なり

いとあつき日ひんかしのつりとのに出てすゝみ給ふ
花 京中名所記 釣殿院号六条院 [illegible]
六条東洞院より河原 今 [illegible]
六条京極也 [illegible]
月のはしめより [illegible]
またしにそひてむかひたりし [illegible]
しゐたる中将よりうちしたしきものとも [illegible]

まかう事てかのしきは也庭清くしてつねに行幸し船と
もおろしらぬ鵜飼して河つきの日ハ清河也と云事あへて
夫くりんあるとし給ふ十二日いとうの日ありてすゝの給ハ
ぬとはり也庭かくきとあるをまくしんけうの清く
そのこ物あるを給へりと也のしとなき給くは乃庭よ出給ぬ
其たちちあると清かつの給ふたに行幸之の池のおもしろき
し鵜ともおろしてこれは見れにてきれと業河つきの日は
つる庭よく侍くもくみてつきあそとてよしのかのこ物給并
西郷よ当りたようとてのまゝる物也
中将乃君もさふらひ給ふ 細 夕霧也 案 夕霧をも指そ
しまふ也
したしき殿上人あまたさふらひて 細 六条院御前也
西川よりたてまつれる鮎ちかき川乃いしふしやう 細

行幸入つくあつし事しまて 案 西川と桂川やときこ川と
いふは賀茂河也東川とふそんも賀茂川乃事なへし 鮎(アユ)
鵜飼(ウカヒ) 鵜飼いしふしやとは河にすむものちいさき魚なへし 河原石伏所
云ふのようちあへあろて西川乃おもしろくかいもとまて
六条 其ときも八物とも云ふもの川乃瀬より鵜のみ取やうにてありて
文字抄云 賀茂の河の瀬によひ鮎(アユ)乃いとあそて河乃石を養ふれんやや
河の近き所ともと稀すてとあさくもあるから堤の上にて
花 西宮抄云禁河 桂河在東府検知 葛野河在東府検知 已上三夏供鮎(ナツヒモアユ)之禁堤(ツヽミ)河
八条川也葛野河之西川也とく
細 西川桂川也此河禁野と云てとくに禁河也らかき河ゑ
賀茂川也此の京物くき也
河 六条院とき川とハ賀茂川也京極川かと云説も河土石
京極川と云条へ寺へはなれを代りかきや上古のあまり

也とは六条院と字河原乃大臣乃六条院を模せる
也源融は嵯峨天皇の子源姓を給て醍醐天皇の御時
と有る也伊勢物語云昔左乃大臣いま
そかりけり賀茂川のほとりに六条わたりに家をいと
おもしろくつくりてすみ給ひけり十月のつこもりかたとき
川とかえ成川白猫死てと　花　亭子院家集云いつし
やうの親王たちおはしまさせてよひとよさけのみ中ニツリ
とうあつるいをとももろもろ親王あまた一首よみて塩竃に
いつかきにけむ朝なきにつりする舟はここによらなむ
汁まんまん人めしてうたよませはててよめりける
きこゆるなと也
さるにてもこの中将のおもひとおもひつゝ
細　柏木なとも　宗因　常にも中将

とよんくかくひるらんらうてもたとんといへり
たうくしく猿やうるとうるれとうくまゐりるらんと
てわれはえしらす　宗　源の汐竃也
花　塩竃を云なりくはしくはやうのしほやきあるなとやすらんすなる也　井細同
さら扇の風もかよはすしほつかなとまて中にいれるわさとせん
わすれもしまかくしても
源とあるとえと
とにかくなると　宗　千賀と塩竃といへり一説陸奥と云説有之
塩竃と河海二云　花は云　うつほの十二宮おもしろきと鞠
お紹て殿もへんしてあそせたるよおりと　宗水
竃をとるあるよしあとよ財そくる物也ききさ衣ものから
みちのく成川のかをかくるに塩竃なるとの新水ッチ花
なる義あり　細　今此世にもあるとておもとうつる物也

ことくにはらさぬはくらぬ　細　ひめおきて含也いとくらし
尊称也　宗　手迹とりまとめやくいとう／＼しく見ゆ
んやたくましとも千級のはきまは所ろなる也
風さいとよくみきゝとも日のさいにくまりなれ宮の白日になる
ほと　細　夏の夜も思ひし
蛍のひかりとも見えいとくらしきに螢御遊ハ　花山院御集
宗これむしハ色ともさりてぬる蛍のをれいとうすきなりさもさなく
さのうへむくたるさのよはりのしきられ　宗　なこし源氏と源
ともいれとも何ぶりにさなの兵部卿宮といはんとて云源也と
いへり　此清少納言枕草子にも云源なる物語手ならに
よる舟と　細　源の御かくまして六条院ハ源しき涙
あたらしくへるそれハとの御たる見えみくおるよしなり
夜闇生微流の心なり

むかしのほとハゆるされすんやとてよもすから御つくり
宗　云礼也清しき云礼のとう如へし
いとうたかくろき　細　あるかたちとあるしとや
物のとともさりてく内またうにくるしれてくるし
名れ宮はへともるりさくさくへくさへとかくれん　弄　きつし
思くるしきさん也
あかし内にそくこなほとにかてかくきれたらちりされこのは
世にあかんとのもとしめつくしもなかてさはめぬへらん
おとうたてさきを得へあるにとまくあれあるひ奉る心よりして
でたんのかともあやはりかるやあるとの給へと　宗　宮仕人ハ
えくいろのぬまてとあれえ宮をってひとをこきしくいれ
きこえられ給へとの源の詞也
めてしきたとくきゝちりて宮もんまつりさとも見よし

殊さらしこまりてあるやうにかくられつゝともしきかうらん
まやまつとしつてゆかしひ給へ　細　人々のこゝろ也　宗　内府の
美達の心也
いつてさしるゝさや　細　源の翔　宗　源乃翔也誰ゆへんのは
ひとをきて得るやうに行ぬへし心の給ふ給へし
於　猿源乃翔也ひとしぬるゝもと云給ふし也　私云　源は
かゝる人もへ事いつて云のしそとも也
ぬとくの此法用ひられむもてめきすて此さくうつき給ふは
名ともつ出典ひとありしうえさてとや也弁おか翁はらひ給へハ
宗　と沼冠乃事也ケカ猿のゝうち物語乃識語神也
きとくしさ海はめ此ひちのへきゝ事と待しかりけるを
宗　弁おか翁の逢坂也　細同
此てるの法かひ事々さし給ふると法のさて法さへ給ふ

もろ女のおなきんうらつゑにてとのもとなのりつて給ふを
宗　蜜巻に内府乃事也給へしるまあり家みてまたて給ふや
うまいつの師匠の書ためも蜜書也の後の給ふ云乃給
まやとん沼へし　新同　細　蜜書乃奥にあり云乃
事也　抄　蜜巻は内大臣家乃給ふとのゝかくよ
てさかへしてとも
小町　もろ人をも持たせぬ法の千年事うるもし人と給ふとて
中翁の法さんあんさてつきてまうとはさやうに　於　指南也
弁おか翁の詞也
あれとひぬへきとさるしやお体とさつて出すつてひ給ふかく
りしさ法さへ　新　解也縁しあるゝ也　細　されどいとも解
也睦解縁しうる心也　宗　そのあらそひにあるへく也さは
やハとさ字也さくなるも也

えうせ侍らしもくせにいれはなれてこゝろせぬかとおもひたまへむくて
もし侍るつやうれうわうき　宗　らうしく思て弁かおもひ
さぬんや
人のきあとのつくしきさうんあるをさに侍きれとけの也
細　落流服なとの事るは人の数損するとや　宗　をには
のやうする物うしさうの未来ハ家のきはやとなんや
家損ハ家の時の人をさもひとのつるんや
まことある事もかなも覚ゆし事　細　清て心はかしとなるよ
と治定し給へるや　宗　源氏のんや
いと思はるはしにたまれまてとゝろてかひともしかてきこう
なりけんな　河　厭父母兄弟妻子族とふてきこえ
落行の乱と云也
拾遺集　あつまとひとりかされて都落ゆるにとをる我身かつし

細　源の爾也さしも内大臣ハ須まとまおまへに侍るおもひとなるや
とくるゝ落とハ兄弟おもはせとなり　宗　源のことなるや
おく府く落也も内府の子ともおもはさはしとなる大
まるに落とハ心より府まてゝるともの事をもよそに侍
のおつまゝて弟落てとのんなる人し
かくつきたそうし　弁　念し侍るや　始ある心持そうしきん
細　始りにる事まちたるかや　此羽撞の告に雪まいるもし
しのひとはりのことも貪るあるんや　宗　難あるらる
やまんや始しきんや
家なそひとくましきにさやうなん物のうゝさえそひ見ん
出まかりなれと　細　源の給ふ御はしく書たるとや
なのりも御うききのとやおもへんなしにてそ思のね
細　我身をとはしもなくさかゆへゆかんえのうつるひと

とおもへるにや 孟 源氏ハ中将也 宋 清くたるといひて此条
皆ありたる人ハ我をさしてもありたる親とうけんうしと
やさしれとも内府をハ君来るとかきくち惜しく給
ん成へし
后くまてもすれ共あるをとあそあらし 宋 内府はさのミ
ちかしれ事あることをハかくさしと源氏の詞也
ちうかうしくさうくまつされ給ひけし給る 細 内大臣とぞ
かきハくされあるすを有しや 宋 内府のまうき
時分女人すそあく思ひくまつされありき給給
との給あり
そこ清くもとらぬ女にやうとかる月のくまなきにちやうれ
いそうあくんと頃く思ひての給ふ 細 ともう服ありくを
さやうすを見てましきとや 思(クモリ)なれ月を漏(ニゴ)さる

あらはなるをくましてハあるハ清る也 宋 そこ清くして
さぬとを濁らる水也 曇なきにやうれつてとハふる
君をさへ見ん内府の娘女乃時不思儀なるをとことは
さうし給ふにそれ服のまいハ不思議とや云へらる水
よ母とたに八雲ある月よるをとことへら
中将の君をもうしくさる給へるをあれともうしとま
めきは 花文章なるや生まれぬとハ文選(ミツ)にとやあ
をいふへり折りしきとあらん成へし 弁 内大臣乃息
の中将を江君乃るをとよく知るまれハ物語を
少々てあるらぬ成へし 細 花の宴文章とハ花ハ柏
木也このこと柏木中納言とまもちて出給ふ
あれとも弁少将よ何してけるとの給ふかくるやう
くらう給へるかは源のすれ子胡をとうしく給

あつ殺は柳木八口ぞともあまき給ふ渉りも　孙　柳木あまり
源よくきこ給ふるよりこれもあさくそなたより也
少将と花散里とそいとうらしし思ひけると　細　さしかみそてなん
ここちのみ世まで殺らとて云也　宗　此ある人ハ源氏させて
ハさる給ふと云而目めつらしく給ふのみ如本
朝臣やさしやれ藤壺などと云氏も給ふ人　弁　朝臣やとゑ源
氏の夕霧よの給ふ節也藤壺などハ藤龍勝の女也と此
ととも給ふ人とも雲井雁のよせ給ふてひとくさ
めふとの給ふ也蜉蝣の女也　細　朝臣やとハ夕霧をさし
ての給ふ也雲井雁なとし嫡給ふことなとも行
之給ふ也
人わろきさんの様乃かよのこころんよりとハ　宗　内大臣の女
など舞(ムコ)にきこひ給ふと源氏の給ふ

おもうしろきうなそてよろしくこさなむは　細　内大臣の渉りと云そら
思はやとも　宗　雲井雁とては源氏ハ兄弟也雲井雁
のことそことさらうらうとうとうもせあてとは源氏はめとうも
蜉蝣(テウロウ)して源氏の給ふ詞如本
河　我宿と頼よしのはまるしいとも
打すしうきはとはしうそいであ
まさかあさくはらんとうらう給ふゆあり　細　蜉蝣也渉月
かやうれるよみまくそうらへきいとよそれ渉よりれとしうよ
細　源と内大臣との渉あそふひ也
さしれ給ふ渉りおる　わ　人の中よろうきにと云也　宗　源と
内府とハ大方ととのうちへのきとハ中宮よりかやうな
息とく下かえ雲居雁るとれてとハ淑中よりうしぬなも
まして中将どのうちまししあまるあてまこゑさも給ふなうさ

とおほしはなちてあさ給ふことを　案　夕霧と内府の
事にとりなし給ひ所はなくして大臣は源氏の心ひ給ふと
なんたうへし
またも夕霧へつゝ也此中は案りあるを　案　内府の子孫の
源の心をと夕霧給へりとや
かく夕霧につきてと　細　をはえんと思出し給ふまゝ
さく給ふにつきて御聟をと見んをはなりてはとおほえ也
案　内府の息女をあ給ふと源氏夕霧給ふに付ても
さいの姫君をとかんをかんこそ　私　御聟なる源の心也
内府の女君給ふに付ても也
まさにはまつりつゝぬるかめて　案　御聟とは内府を
云人はかはり給ふしきことや
またあされなきや　細　さやは詞の字也

いと物ましくしきをひあるところつき給へるもて
細　内大臣のるや　案　内府は心の物深さ人のてをしくしき
んや善悪のさてをとたてくまてなやしえうるるまと
とれ人なるくれぬる内府る此源の給や
よそおしきもあらしあるやうにもてなや　細　人の善
悪のあちうち給ひ乃はる心や
又まてあちうちるむるもとんなしとある君とくるれて
翠　内のおとゝの心をも人とまてなやしえうるむるとを
人をきゝまてよまとや
いつに物しせとみつん　案　内府のをはえとあるむ給ふ
とゝろまし給ふにいみとは君物しとこのみんとあ
源の心や
御用ときけまさて　細　一向まえしきて給ふ乃きかとや

この君をとりてそたまくらにあるらくハ物はなし
宗 玉鬘のるや内府の娘にてはへるらくも心えられすつ
ほき給ひんやうや
いとほしくまてすてられたると思ひけ 細 玉鬘を内の
おとゝに見せをもすゝハ一廉(カド)ありぬへき物にてか
く養育(ヤウイク)ありしハ随分二る勘考(カウカン)そやうそをなしてと
源の心の中や 宗 されハくるしくとの心や
夕はきを嫌とはもとよりその色ありてわきんくを
そへるそ 宗 晩涼(バンリヤウ)のことをいへり
心をもくうちとけすまんや風ふくやうに中にいと
おもしろへきよりひるもありにあるやとて 細 源の詞
宗 いらえんへくハ夕霧あると律ひくもそく給へるとて源
氏ハ玉鬘の侍よへ出ゆや

西のたいハよそへ給へる君たちも皆涼をとらせ給ふに来り給ふ
きこえられけれハ此のおほくしきにあるよしともあれ
たゝあるまゝもやさしきまて思ふよ 西のたいハ 細 玉鬘の詞
なるや
おとゝ姫君をもうしとてゆへて給へるそ 細 おとゝの心を読てなるとく
心はへしやとて八内へ出給へるをや 宗 源詞お物あんへる
ら玉鬘見まほしれハ内へ給へりしかんあるへし
宗 玉鬘よそへちゝふるぬ給ておぼつかなきを遊給んやよ
との給や分らん
思ひて 細 うち思ひて源氏の給や
おぼつかなきとみてまうてきて 細 見まほし源の詞
いとうあるさまにあるを 宗 見これへく
まし侍てもてなし推察てくたされと中将の

宮仕の人にて斟酌し給ふよしにて御格子まゐらせ
故也　弄　侍従なるを此君の事しらぬ所まても給ふて
うちまかせたるに思ふ子なるの也
中将のいと忍ひやかなれ人にかく引て立ぬ　弄　指声の中将おもと
うちそひて西のたいへ渡るとみえたるもきこしもとみえたるを見送え
なとも家司しや又云夕霧丸右方とのをてさそひことなと
ここに総々此時まて中将ハ宰相とこそ左中将ハまし
てよそのまうて見えさせたるをしらるるのや
細　夕霧の宮仕をとりつ　弄　此中将宮人にてさ人ハ也
よろ給ふぬよし花みるふ見えとも　祇云説ハ内府君
是ハ皆わかり給へと夕霧ハわかまて給たぬよし見ん
みえ人しらぬ也
むきんなあなたうしこれ人にかこれ思ふ心ありけるかし

弄
云ん也又心さしの云含のくる也
思ふんまする能なかし　弄　柳原兄中将扨葉へけさう
のんおる人しとも　弄　中将をそらめてこれ扨葉と床
しとこうぬハ何しやも　源の人也
あるとくしきこえるをとたたさらのうちまるほとハ程なまして
うひく　花みるをやしきき人と云やまとのうちまるや
ハ数の声はあつ人のむをとめと云也　細　うきうち見んさく
宮ノ内なる程ハゆるしく云へる常の事也
弄　さしてもしるれ人のむをとめさく宮ノ中に旅てさま
くれんぬハゆうしく思ふまして　との人也
そろうしさ程にあるハいとせにもれてさうらしくゐん云
おもひたひ人なる　そろうし　河細碎　白氏文集
細　さかしとるたるをも人のありてありうかるかひるるにとれ

ハことりか也　宗　此羽ハ山源の里ハ下加へしゆくる身なりと
かんも共とくしく弁かねるとこそいへんとや
かくし拘ともれとも頃うたん人のもえたとひようんまつなきるの
し　孫　源の里人〈玄〉ハけまこあまをまちうるといさすか
いうて也云んなや　宗　然上ある歴（れき）くありしまもとしと
ちもそうたる人の人くるま人かあさうれんをはなさえなれ
たかひかりしとや

かくてものし孫かひつてきゆうあるしん人のをしききれかなさ
はなさくとも見えんるともらうくしときまして　宗　武蔵野ハ枯
にあらしまきを八次まる中ね弁おねたねるとのくし
ききむんきし花狩るとともむるとく孫ひし　かま云をと
ハ家まよりまいゆくにん又けちを武蔵野よ源孫孫也
孫ひとひを迎へるんうあるかんもちしけるとさくめ花咲

孫山　細　人くのらとるんへき本をこはうちくるや
おまへへはミそれうしきこ花栽るとことへさを孫山ひきにし
こ乃いろをとくの人へあるかられやきとのままおいとちうつりく
ゆひそすてきたるれあるなたくへのつしもとかんやみみたち
よみそ　河　牛麦（ナデシコ 万葉）石竹（白氏文集）金錢 架蘺　花乃くるしとう
ちしきニ花栽とハあきこれとそしてたる梅けの汁
とうへてもきいかとこや梅のハ武蔵野にさとくへ帰り幕
本まにに山賤の墻かあるとそしてあるるをや
宗　あとちるる花ハなくてなあしことゝへはう孫や
んのまくふをねとらぬとほうさこてゆとく姫　宗　常夏
かことも武蔵野にうるんへ面の孫や　細　唐上人へあとあり
麻夏乃けや武蔵野れうすとすくめり　宗　武蔵野と梅子に
六とくてきうかんくうえてつぬハさるあるしも花の中に

梅子とおもひぬるにあやなしとのたまへり
いらへくるしくあなかまとふたはとをつかしけれど
め申させ給へれ　弄　ほめたる詞也　細　源乃詞也玉鬘ハよし
親おや乃ほまれにあるべきやと　孟　ほめあへる詞也おやとらぬ
いらへくやはしきてゐる人こそ也　宗　思ひちのくるしき
とりなしに可然人へくと源のほめ給詞也
大臣の中将ハまして此心もつくしてんきかまりて心をくるしきとさまたり
て　孟　柏木也前にも玉鬘へ心を寄せし人也此時
大臣中将也　宗　此中将乃こと也柏木中将なり也
細　柏木なり
いみそとと思ひよまさるゆゑやうしあなるいとおさしきこれも給
ひそなひとの給ふ　細　思ひよる心此事の後ハ又ハうまくさせるあ
とや　宗　玉かつらに源の中将乃ことを喜給詞也

中将君ハかくよそにゆかりとされてあるをまことにならさめ給
へり　弄　夕霧乃事　細　夕霧也列に候せまする事也草子地
なり　宗　夕霧乃ことをほめ給也
中将をいとひ給ふそおとくハほいならされ　花　是よりさき玉
鬘とのは物語也　細　源乃詞雲居乃君をゆるさぬる也
宗　夕霧と内府のいとひ給ふをとかくするよのみや
ましてあなかくさまにくしうあるなれに　細　君たちとに皆立ん
ことなとまま孫なるとハいひてなと如べし
物語ハまことのちかつて物語しかくしなるとよや
花　夕霧乃事也かくてなるハ領字也それハ思ひあるらん也
こゝろみを人かてそてあるへきこととのいへり　宗　内府乃
名の此中ハ夕霧ハ大臣の心をもちてかくなすし
きくと玉鬘に此給也大臣子以上ハまた孫の大とかきたる

枕をとりて夕霧と内府の子達までもひきくへての給也
河 わが家をことさらに惜をもとめらるゝを世のたとへさまを
むこにせんがへさられなどにそきん給ふ人にとよりそせ
よきむこ
信ろ楽 我家呂
ときさかとりふくもゆかしくと常の給 花 是ハ玉鬘の君を
意也 我は見ゆると云ふつきて我家の曲の詞をもて
いひつる心のまゝ也 夕霧をもとりたてて さまとも給ふくをと
くともいやまでいちすぢやうに常の給也 細 以下さてか
内府まうちぎみのみや 細 玉鬘乃詞也 此給のまゝ
なり催馬楽の詞まで云り 弄 玉の詞也 上は大きみ
をもちまでや あの詞を詩て催馬楽我家乃詞かく
くの給也 されハ夕がさくれは何よ肴んなと云楽の詞
みな夕霧也 玉の心をむこにせんとおぼえさるやり

とりなし給也
以そその時さられまてをやさまいん給ふハ猶ゆうしくは
花 この時給へると我家の詞にありさとくしさむこ入
の後はと云也 弄 と給ふまでをやさまいんとハわさ
細 となれとられまてみて九給へまつらすと源氏の給也 同弄
源の詞 同催馬楽乃詞也 宗うらひ給の詞をとらいて九ん
給へきとらる心にきとまでさやと舞ふさ夜
ハ猶うりくゝるとも たくそるる夕霧わきさすれとら
かんまゝうきて九給ふをさと源の給也
なくおさゝられとられむすひをときせん け ともとらし月
なそて給ふむきの詩くさるり 細 三条宮よまうしくを
る時からまや 河 右先代の御中に今まで給ひ給んをとて
をとはむろー御すんし

まさかりうちよりのさく見てうろうしめたらかれて　細　源にまかり
で給ひてあしくはあしきぬきとや　宗　夕霧と六位
なりて内府の心にあかぬつるとや
志らもとりはてゝこゝにまうでをも給ひてんはらしからへくハはり
かまりしやかると　宗　内府ハたく志らもとりはてゝ源にまうてを
給ひて官位をもとゝめせんにハをんえとハあらしとや
うめき給ふ　細　翁隠し給也　宗　源の御聟に對し口惜な
とくの給さ夜ゝや
さるべう論はんの隔あるほとなりけることも思ひ給ふをもあや
まちてしきをまかせれバとるにハ哀まつてくまはなと
花　是ハ御聟のみにとひ給ふ事也　細　さいはひ源といふ御聟の
みや法ていハ源と内大臣との御中かくへてともなきかり
ようや　宗　是ハ御聟をみんに源と内府仲中をよからぬと

とくさる給てハ數に志て遠なまゝんとも思ひとな
きのあらそひて　ま元とや
清とちかゝ汚されんとゝろまお清とあかしてまかりまさり
ちかくて　宗　六月の末はつるうひの頃の様也
河のうへやかるをと火てさまりとて人みしてうちと火のた
いひとりかゝるにとめ清おしきたまる　孫　灯をも落ちうき
ハおつきんかるへし
和琴のおるを引よせて給てかき合し給へる　宗　源の弾給
なるへし
つまちにかくしきて遠くあり給もいとよくならされたるとして
みえ給て　宗　此調ハ和琴にも御聟の志らへてこそ給ひと弾
てかく給ふ律にまよくしらへられたりといふのはつきハ秋
の調にあるにとハ夏なれハ不審なるへし　但六月の末なれ

こともれハ志由をとるとぬへしそれるとぬ事ハ秋の節也
かやうなとハ清らまいてぬをとちうすやと月ころおもひおとし
聞えけれ　かやうのことハ　細　和琴をとりて弾ずるか給
のゝはもとき筋ならぬひかきつり給ひしまよく
志らへ給とや　宗　源の心也玉鬘ハ和琴なとハ玄葉肉ま
あらんとおもひおとし給へたてハ和琴なとも近き給ある
ときの心也
秋のよの月かけすゝしきほと　孫　虫のこゑハ和琴の面白き
普通との給也
いとおくふかくハあらて出乃数よりなし　何ともあり
ほとちかくいまめかしき物の音なり　弄　月なとの和らし
ちかくの心也　細　月をとなるゆへにしちかきよしや
ことくしきしらへもてなししとけなしや　宗　源のたくと

いきさ給和琴ハ早くし給調也ほのかなるかんしそなる
ゐとまれ我なれハとくしきしとけなしかなや
細　志らへをたゝしとも
このもよさなから　細　和琴をいふ　孫　此和琴ハよくとゝの
事也　宗　おほくの楽器の拍子をしも此和琴ハよくとゝの
へとめたるものゝ事也
おほくのあそひものゝ拍子しとゝのへとりたるなん
細　よくのあそひ物を吉拍子をとゝのふる也
いとかしこきやまとこととはかなくみせてきはもなくし
をきたることなり　花　和琴にあるも河海の説おやまわろ
なあるまじきや　細　広く異国ハ高麗もろこし此楽（カク）器多也
宗　和琴ハ広れたるあれとさかしき物そといひてもわろし
の楽なとをしらぬ女のためなれハおほゆるなる和琴とそいふ也

ひろくさとこえのことをとつて女のさためとゝらんおほゆらあるま
しくハんとゝめて　細　女なとのさためにきこえて身ちかろうとや
ものなとにつきほゝきてなし　紀人　細　昔ハ和琴とそいひし
あそきしやと代々さ琢あるれ
あなれんとて何さへるるにあらしとあすりしまつくしゆかしと有
さきう体てとハかくさうすやはらかしとハこれから丸のおとくに
あはらく婦人なりし　細　和琴とハ和琴にあるとのとくさのきぬ
うちつけハなれ和らやなや　栄　和琴とハふるれ物といへとも
ゆしあつしとハうれ也又宝文よく弾うなかとまとあさ
きこそなや
さくなれきおなりしもとつゝさの経よろ門のまつくねこ
まこちらひとつかうまくてそはらさの秘事なゝるゝと
紀人也　孟　和琴とハうち陰とゝと河　和琴とゝ女有　弄同

栄
清掻（スカガキ）　和琴とひくさまなとまうて又くさうの絃を用ゆ内
侍一絃乃上のもの撥乃式部卿よくさるゝと語也
ほのくらくしあ　細　式部卿ハちとんへて也　栄　式部卿の内侍
乃和琴をよまのよしやのくせ也あさりあめてゆつてしたえ
父をゆるしやきたんや又添の和琴とけてと伐語語をとさく
てまる乃をほのくにん語語とや
いそやおわりは事なれとも　栄　何とましても引かくひまさ
とのんきつら
いとくうちしさて　弄　式部卿父をゆるしくと語也
栄　式部卿の内侍乃和琴をゆるしとや
これなるさにさるとめへきにはあるさひのわかなと　花　式部卿の
調也　細　式部卿のんや内大臣の記号をとくつとまあ
らんと也　栄　六条院のことをとめるはるをひうなと此わ

昔ハ内宴の和琴とゝと玉鬘此次侍る事ともかくらんなる
なるなり
ことゝ侍るにや 弄 玉乃詞又の和琴とみえ侍也
はやしきさ山川なとの中にもとまる殊更のおもしろく侍るなる
なれハそとしちつくんやもくやとてそ云よろしくつれさえなく
生ぬるはさ海なとみや侍らんとゆうしきにせちはよくまうり
て思ひ侍れたる 細 雅をもひくんをあまうさ侍れともくれなる
ハ宿くるにとも 弄 律くしみてのさす 箋 玉鬘此様を
多くのるすとこふり和琴たるとこらくまのともあらしやせ
これハ雅をもひく物とそうかとさひしにて八さゆうにて
手下よとて云ひけるよとや玉鬘此せちふんまへの給とや
侍りし 花 是ハ源の詞也 細 源氏乃玉鬘のんをさうて
はるそと同じく給ふ詞や

はつきなくて人々とえちへてうるさ多るやうやうれと 弄 為ちかひ
多うるやうや 細 おやしきさ山がちなるとてふかくれるなる
きこゆるやうや 弄 此子の和琴にあるなる 楽ハ有ろしき本
ともそれなるこれハはつまのあ中ひくるやうにくるさたる
名ある物も和国にてハ本地をなる物とこそや
法義の治はらひさも此川さんのつくさをとめすハ人のくるまさ
云くさとこてふそれこれと物のおやとえらうしあるにこそはあれ
萬(ハヅ)玄寮(ヱヨノツカサ)和琴ハ伊弉冊(イサナミ)尊の代に合作出侍さて仍弦楽器
の家人々をとくるなり 花 和琴とハ伊弉諾(イサナキ)伊弉冊(イサナミ)の二神
の御代よりも出来ぬるうつほ物とこそへとも日本紀なととも云
見しく侍る政又天岩戸ニ天照大神此所の神宴より
いそきぬりそう宗祇ハ弓六張をならへてつるをはう
ちならしけることを和琴といふ始ハ律なるとつるしたる也

そうしん此世のうちをとりする中にて此陰をとられへく候
るゝなりとおもはれるゝなやみんのはゝきハ男官をも為玄窓と
云女官をハ書司と云和哥をもよむ司乃女官あつかりしやなと
をも法なとあつしとらふ又拾女武官多れ法師なとく和哥を
のみ好也家々出来るなと出来る窓ちよる所よりまそて以つ立の業
窓よりとも又よをとりてるかとおまへると所るによりて見と地
乃おやとをとらつ此羽ハ内のおもくれ和歌と上手なる事
をとらんとて以つる也　細　またおやなハ和哥とも地のおやと
出つ好也　栄　気と地の気とハ日本わたくハ和哥とも上手窓
須上とや
又此中のもおや心あつへき法てよりひきさるよう詠てらんを
出むとあつさるんへし　栄　内符ならとも武盤者此作詠公の一段
よくよくあらせ詠りんとのゝまい源の詠ゝり

ことにおとも法るへきをんれるさとみそもの〳〵詠ひさすんをとこれこ
とに　細　此力なるとみてさりぬへき法皇のわるるとにとはるよ
家々立苔なれさや
てわしまいはるとあさうくにくきちなくし詠さんるよやかさ
くらんものく上手とハ今の世の乃ちともあまそくしにのこそあめ
詠　細　あてあるとよそてとをわしまいにきさ詠へきるより八宿々
さ死とや　栄　六条院なとへ内符乃つきも詠ても自然和
歌と諸詠てとハ宿ともよ死にひをとおしまいにいはきしらに
ひきう詠まうしきとや必地乃上にハんなおもくハうちを達
てし詠たる女地そとや
法りとも法なるそきき詠てんりしとて志へるそらしむきた
まうす　栄　気さみたるるれなめ其源氏の詠へり
あとつひきのらひまめくくわしし　河　とつひとハ相て数かう

きり和琴にてとつひとつきちとき弁とつかるまあり猶かり
氏十巻に秘抄は乃至たゞくちとつ八ちとつひとつゝれそれを
くるや或説るに此字の也琴との字に形をまく 花 柏氏十巻
抄云ちとつ紀ちとつひとつさい三説あり ことつき八への分
はさらもやことつひ八それをくるかつかりきゆる説かり
まのくしくもるゝ二箇やうにあひするんやさひ八貞
由の曲に世さるもそくるをとつするのや遍心性にあちるしを
せみするかる八ち申さ抄く宗やくもとへたへの大ありしにを
しるにこ見るはとしる風情やことつひの弦との字八るす
の字也琴と此字はあくまてとさい是兵への弟しらえは
きたるや互て用之 私 ことはひや八弦と此ゑるをとひ
や 細 ちとつひとつ八源乃ろさるへし説拵をとうくさひく
とハん説はるゝ少く海なくしきたくきや

宗 此ふのをと中院は愛菴ゐかゝなりて文あり其返答は
色大略同意なる 宗のを紀をもせさゐる曲此趣乃はあ
きをむとて絶えたるにあらぬ由なしを大臣は彼人と
小兄は彼人の彼つきたるんや 宗の意たる時をやめする
ん如へし此中院も東山の内府とやしや
こまでハ色をかさまる猶すや侍らんとおやの居ゆかしきをも
るひく 細 只もと源のひき給へるをとくひめ紀はこれなりは
たるすへ所くあるへきさゝやと云説也 宗 内府の意ハ源
のゝ色まうさるを給ふまや今の玉鬘のん如へし
こゝろすみて侍へりたまんとにたてゝちかき給はんと
きゝむすると云る給ふり 宗 筆此字也絶ゆきに担ことぞ
ゑゝつまや
ぬきこそまれせくのやうにたるとひとまうしくさかひ給ふかわや

さうはまことにちからなくひつかさともおもふらん
しらひかをうちきての河とらひきて返事もろく申も
河 貫河(スキカハ)侍る(禾呂) ぬきかはのやはらたまくらやはらかにぬる
よもあらでおやさくる親はつき 一段 おやさくるつまは
しかるかりし家のもとにはやまかはのつまをかりつよむ
二段 しかりくてせんかいの河とのしきもかくやしきに
もとるさきてまたやちるらん 三段 ぬきかはのせゝのやはらた
はやくかくてもいかんとて下の文字を略して
まやうにいかしの侍るまや又おやさくるはきも思ひ
何か紫式部のもんかくことをさしてこゝろさしひき
しらちもとひかてといかりさるたる人
新ナラ 同やうに夫めおとをひきてやらしきもつの答
たましはら梢のなかやとらへ時にたましに親のつる所なる

我又梢を略して夜とともにおもふ一段おやさくるも
いふを源氏紫式部のそむき給ふとよせて侍る也
細 やうなさまにてかくれは人の時にたかひてそのしに
はたをてこそゆかとをいふおやさくるつまは二義あり
源の内大臣とさまに給をいふ又の義は源をおやのやう
ふうと紫式部のしきは仍かくとも也 案 おやさくる親つまと
いふ是をうちこゝのの詞や紫式部ふことを内府のつまを給
つ源との御中をさまを給ひんとて源氏してひ給や
そてひき給へ仍しはんよみんちぬる子さきなり 案 源の紫式部
又ひき給へともくめ給詞や義の字文を人またちら給
いふうしぬてとくいふ河しやは文字のうちや 細 一切の蔵経
人またちてはいかならぬ中や人のやとし也
ゐうぬまんかるまてそふのうちにまかせかれ人をもちけめ

宋 唐の女みて想夫憐とうたふを宮みて恋夫恋とかくかと
こゝを恋ひする心にて楽なれハ女ハちとちかふとむかしや云へ
ハさうましきるの心や憐と恋ゐと同じことくや
おもふてくれにはきあはせてるとおもふにとせちに
思ひ給へと　花 おもふてハ物まちぬへや　細 ちら給ひて
名をのみと合奏し給へとや　宋 あつれなくこれはまじとも
うらみくさしくハよらにしとくや
たる女中れく夜みくほのかに京人ともののふかる声かおほ君女
かとしる心ましくれハ心ることみをやと情くものしくてもなれ
給ひに　花 この夜ハつくれあるらんや 玉鬘のんや 宋 玉鬘れんや
琵琶にて京より下るる人にて声かおほさまに女と思ふ
源るさくにひし女ぬへしそまでにあすらひくく心さ給へハひ
くとあらんとはしく給ん如へし 細 古文あると見女のうそや

恋ひしとおもふ給ハゞさんきくと琴ことゝもやとかもとるかよ
細 玉鬘の詞 源よしかおそらし給へとや 宋 同じくそう
ことまやとの給ふへし
こゝは枕にハよりそちらくいきとうりて 宋 源氏かく玉鬘
のみさうとより給や
みれる風の吹うひくかくハひくき給ふるよおそてうちかさ
みさ給ふつけさはかさに 宋 玉鬘は源の風吹をかめ給
詞や 楽ハ皆風をかさそひてもそことなれハめにいうう
一切楽器ハ風と笙もうおちなれちや
いとうれくもをまう 宋 玉鬘の心と源の心給んや
もとひ給て 宋 源のさ心なるへし
見てかくらぬ人のそとめみてかう山風と吹そふらう
とてよしより給 花 是ハ源の心答の詞や 弄 源氏の我

語るやも玉鬘の力てうち出んこともまての給ふ也　細　あさくは
思めて給ふともや源の我心をうち給すちのるを
まさくといま給ハさうをとぞ云り　孟　ひとされて乃狗也へハ
花の狗にひかるる風乃吹くうひくかくハいてさ給をとも玉
鬘れの給をうきてしと又源氏の給つり玉鬘ハ我さこ
ゆるさしとこさく給つぬ人まれた風も身にしみましとや
それと風の音をとさくにつきて玉鬘ハ見てうち出ん
とも耳ミ ささくぬとハ源氏乃我こととの給つり耳さ
これするまて風乃音も身すしむとの給つりひとへ玉鬘
乃源氏の事語らし給をとさくいま給つぬまうまて
めさひかり
いとらめましし　孟　源乃ひさ語し給をと玉鬘れはうぬこく
ろさまるへし

人くちくちかへハまさへのさいかれしとも云ひと給ふて
て　孟　おもとを始く女房達のあるへしや
あやしこをはうてとこれくくへの立語りぬるうれ
細　前ザキよしるるや　孟　前源の家にかうり給時に人達の
語語とうきり語語給と見てしあり玉鬘よはうへる
うしろよさうきて　ハ人達語語奴へし
ひそねとくみとこれ花その月をもまん　細　玉鬘れたす
をとめつ　孟　玉鬘れことを花そのとふり文内符よ
見をも見くせ家の源氏の心や世中をも定るまきれハ
ひとかれしとも云ことぬさにもあさもや家との心や
あるいとはほるさとまなる　細　世ハ定ちれあなまれくや
いあしへとものほつくにてるさらて給へうしとをそくいまの
るやそ給ひゆうやうてまうこの給ひうて あるふと

花
昔の面影乃ゆかしかれ給ふなるへしこれなりとの給し
ことや　細同
いとほしけれはなり　細　夕顔乃上を思ひ出給ふ也　弁　抄同
なてしこのとこなつかしき色をみはもとの垣根を人や尋ねん
細　玉鬘をなつかしく思給ふよしを内大臣へ申給ひし夕顔の
上の行末を尋出給ひてかくしおき給ふと也
宗　源の心やんことなき玉鬘を内府のかたへ給ひて必夕顔乃ことを
尋給はんとや　それともとの垣根といへり夕顔乃事
を尋給ひて源のかくし置給へるをしらせ給ふ
むかしもまたも内府ゑ知らせ給はぬ也
花　撫子宮女合判云
秋也　とこなつかしきは花のとこといひかけたる詞そなる
き
もとの垣根とは夕顔上乃事をいへり
山賤（カツ）のかきほにおふるものしはかりにまかれる事や　玉鬘と内
府の方へさやうにはもとのかきねやはゆかしう給はん
をことつけしらへさまとや
此とのゝまうけにはとのゝこゝろさしにてこそ　弁　玉鬘のことを内の大臣
にもらし給ひて夕顔乃ことを申給はんそかなしう
きみとや
まゐらせはいかならん思ふやうにはゆかぬことの給ふやうにもかく
なきそて　花　玉鬘は源にかくて文にまいらせ給はぬを
くやしきとや　弁　玉鬘はことをうちいたす事や
細
いふかひなしとや
引歌
ふるさとにわれはなれしこはなりやむとするもうきことのあてきに
山賤のかきほにおひし撫子のもとの根さしを誰か尋ねん
細
我身をも母上をも卑下してよむ也　花　玉鬘のかへし内
もとのねさしまては内府をもたつね給はんやとなく対面

はかなきを行へくもなんや　宗　式部の返答も山懐よりも思ひを
なとも人にあはぬさきれハもとの様にしまりて八内侍君
語りしとや
きこれをたゝ思ふにすゝ行つるにまきたりとさまつしくわりや
かたりしにつまりしかりとうちもし行て　細　引なの未勤心
八雁ときく人ははせなくハかる一ことも少き語まりしさきとや
ほとくしき法んをくるしなまりて元あはひそうまりしくおほさ
なるよりそりも語るかもなほまりうち志きなさ人の見なるてまい
をきとかあつへき隠とハ人の我かておほりしとめて
宗　源氏のんや　これくまりしかりも源氏し語や
ひるへきるすとしりて法文からよさぬあるとなし　宗　式部
への文のまりしやくまてハ叶ぬことを源のさくに出る
初へ又乃かりふとや
きくら氏法ことのゝ物書法によりなるたり　細　ゆきかく
に思案し語や
あそかくあへあたゝきさとしるむきうしぬ物にひとそ
らん　宗　はちきとあたるかと源氏んてしきしあるや
さそりしかそて人のまくみをあくハ人の人かそしなきやうむと
のかるくしさ系たあやとハ内のちまてこれ人のはなきめつと
わくかへし　宗　世上の人ハさやうに系をはりも源とハ之え
しよそてわるはかくあるうせん式部のことめつとおき
きとや
うきうとなるは法んさしかつてとも　宗　源の式部と限る法
つかひ語とおちるはとも世上語すんあるしとのんや
ゝるのとへ乃法おほしよあし始そそりハわりんとおつくえある
まりをおほしたりさるとゝるのゝ人　細　紫上也

ゆくそれ好ミてはちりにたえさらんハゆゝしんかゝあらひ
といふまそ　細　みつしのすゝみて八曲ともあるまじきや
孟　めかんと花散里なとの御こゝろはらひすて八さもあるまし
て見ては宮なとしきこゆるも玉鬘などゝ源の給へり
人々るさハ也となれ　孟　源にそ玉鬘とハきこえんにわ木の
もとさるへき也
思ふ人おほくて年ころつくらん　孟　六条院の心なく
の事也
まゐりて八ちゝみの御ゆゑもへたてもなくらん　孟　玉鬘を
いとかくさうらひ給ふのことゝもと思ひ給ふもちかきる孫にて
ハゆくしとのことゝもそれをかくらんといふなり
ちとさるもとちかき納言のちさんのこゝろちかくてさらんに
ハおさるとぬへきゝみなとこゝろのこよひ御事よるにいとゝくお

しるそて　孟　さしても有き此成大納言中納言なとの御わたりの
人の妻になりとも二心なくあまたくハ源の末くれたひ人
よろしハさ給ふへんとの源の心也下にもみえて髭黒の大将
なとのこともとおもひより給へるにや　花ちる同
宮大将なとこそやゆるしてまし　孟　兵部卿宮髭黒大将
まいひはさもあんなとや
ゆてまてなるれハさなとひとりてはえおもひもさためかしきまん
やうなひさま紀にかくさもとなんとおもひ給へともわりさ
まことやうらひ給ひくちかきをさん給ひ今ハ源にてとそし
思ひなりぬ給ふよりかるとつきてちゝやうにあれより給ふ姫
見ともちかくめてそむつましくうちてもおもひ給ひしう
細　兵部卿宮は大将なとの事と見て給ゆてしかとも花ちる説
かく　孟　兵部卿大将なとこれまて玉鬘ともむつましくハ源氏

一 もてなされてうかゝんやともやうにし給ふて源氏
のけさうれんとの給ともうひろこきうしてそしてうかゝん
給はせ給もさてんゝとことわりもあるさとも
かくあるもあまりにしろめる紀伊は〔?〕さうやとありと
やうくめなれていとしもうこと思ひて給ひは 箋 源の御
心はかりんとやすらちとハさ給ひしとお内をハ我御勢
乃御心ところのまゝとちなれてともあまれとのこと也
たゝ人さへはいとへとあれくしうくぬ内とに思しうくし
あとして身ゝはしにいとあい給つきゝ御こゝまさと給なれ
いあとさてともえせくし中ゝましくお内しうは
箋 あさうのうさん乃身はしくのやうにもて我御とする
勢し給とも
さてえ思ひてあくゝゝうさきへくさるへくときおもはくは

まうれくらちえのひめのとともおもひてあるくさゝちんや
細 宮大将をもむえにとらせてさんへてさくへさ見とも 弄
ち(モリ)はうくこともおやとにひうはさうらんいようへき
見とも 箋 あうさて又ちゝあらくにも給りんとの源氏
乃御心也
かくまさうあれぬ内と乃ちうくうしさうそんくろうしくを
はかられ 箋 心を世のまぬとハいまくあさうれんともしう
給はぬことといふり源氏御勢をいひあひうさん我を
うもつくりしきとも
とのいくせさあきつくしともおのんあうそあ 花人
せくこともせうまりしきん也 弄 実守とハ常にまうん
とも後(シュゴ)とうるさとい子を彼心くも我御意見一部
箋 紫上とらうしとおしてえ見 箋 紫上と実ちといふりうき

ともひかさめ給ふ玉鬘わかくよみもらし給へく 源氏ハ
えはかんとや 又一説よむかしのかたにもよめる人
もあるへしいつまてかも玉鬘さしはへて宗なくやとや
河古 人さま徒我からむかし此哥也またひくとにかへも給ふらん
いとわりなきそひなくて 孫 源の哀志かるなり
我心もそひかるなハ志けくともさらにしらぬなりとやおほかるも
宗 哥なる哉くとともさかりしりとや
細 源意之 ほくそ山せ山哉山哉なれとそひ哀かそれさかりきけり
いときしるぬかとあるや 細 草子地也 孫 さりしるぬといふ
うるさハ又そ春し給んや 弄 未同 宗 華花か此批判乃詞也
いよくかもとかくれとそかしくんもかしくんなりの説有
そひきくさんことのとあさかうさ倫よりくえそよりまて
むかしきはかさしひなりけり 花 芝ハ源乃心ようとやき

ましうやせましとかまさそかくさめぬ新をのはかくかうかく
なされハむつらしきとや 宗 なのめとハあなかちかくとくあらす
れほくせ哉は中なれとともさハ志なさ身なるむつかしき
うるさしひとや 源乃活んなるへし
うちの物語ハ度々これの後の詞もさめのなりとかのへもゆる
さぬるめかひ 細 そ江戸也 宗 内府乃家へもそくかむ
家とのんや
世のも帰さあるなりやとくしてもものゝかもとものゝ給ふに 細 侯さを
あるかもと云詞也 宗 帰さなるみへける時へ帰まきたてる
とくましたるやとあかりふや又かまたあるとのんともいふて
おはのことれつてにおほきおとしれかるかやとくさへめるひ給
幸らるとかの田とは 細 源のとひ給ふしと又かくに絵通也
宗 前よくとは見のこととも弁おほくよ源氏の君を給しても

いま内府は弁おもはくるをとやかうくや
さうもこそ年比とゞめもさゝぬ　細　これより内府の
詞　弄　内府の詞玉鬘ならぬとておもへし給也　孟　内府
の詞也これにこそ源氏の給ふ也
山賤の子むかへとりてまめしうかれおさく人のうへ有とき
給ひぬおとくのこゝろさまも内くとはなくてそおとしめ給
や　孟　玉鬘のうへをいへり
これそおほしはなる心ちしける也の給ふ　花　をの源詞よりは
八中くおほしはなるゝ心ちもする也ハ面目なしき也
弄　何ゆゑとも知人のこれそ思ておほゆる也也　孟　内府の
源は遠（イ恨）慮なとも也
おほのかれしのあさつはきくなるへを　細　玉鬘をほめ給也
ひ　玉乃るのかね詞也

いとなくとも知れむかひとゆるかたちにあらん侍るかた源氏をん
宮たちをいつくしむそくめての給ふ也と　孟　玉鬘のことを
子をもとも知れ人かやうし弁少将内府は給ふ也
おほろけにもあらしやなんくもしたるをとも人めるやう
や給ひて　細　大宮をはなくもくれある也おもへしたとも也
いそなれハ知れ申しのあはれむをもて也それの心のおほしのこと
やみしこそ人のうへなれさてそ何かよきもあはれみのに何も
もくせりし人くしきほとたかしへ　細　内府乃詞源の浩むをあ
とやもをもさそゆる如へし　孟　玉鬘をおとしての給
たるへし
年ごろのむかまし　孟　宮の御ハ内府乃玉鬘をとさせる人は
てハ何し源のむをそめといふ夫かにあるへく宮たちをと
ふとくかへてかひとなる也給て可然人なしハ此年月

色々をうかひ給へんにいとまれに宗清くこゝろへてハあらし
かやせ上の人乃心ちさせ給ふ故に出来すれはよかりきて
ろかく見えとや
ゆくしれとくのちりをはらはむこの世ならぬ道にさそはるゝ事こそかれ
はしあり海に　露をはらふ人にきこえれぬ人と源の
わめぐる絹なり山崎にもそれゆるとあるとまかりたる源の
威光をおそり内府乃詞也　花同
おもひしるしれもしをめりつきてきえにきゆる哉らんと
思ひやりめてたきかり物し給ひておほゆるのこれさくなく
てころもをとるにかありしおもふをちらしすれとはかられ
おもとの　細 紫上の法様也　紹 紫上は源氏のちなれるや
宗 面目らしきてとや紫上乃ことや香腹に源氏のあるれかき
さとやむまとめなら給ひてきはかくハ内府まうしさり事

そのまゝくちをしかりけるえんとや
うゑてたゝりしをはらひもすなほにせさせて　宗 おもしろハてみるをかなしく
何やかやおもんとおほさるゝ　宗 おほつかなくとや内大臣乃姫君のこと歟
そのまゝ姫君と申せしハうちの源氏乃けうしをはりし
細 と姫君とハ玉鬘也 實の子ナリて内大臣より又見きとや
玉鬘ハとやさせる人ともはらしと源の可絵めされる
せんてあまたさらすハ源氏の子にあらしとや
さまうにいとゆうしきある所につき給へるへきてまてちかひ給
娘なりんと心ひかれし給ふ　宗 源氏のかたとある人とやたくも
てなすうらみもえなれは源氏のやうにて可絵と内府乃心
ひかれし給詞也
おもくいふて宮らるたる歟　紹 實は人の前たる内府へゝとの給也
宗 玉鬘にかゝとへくりを給らハゝく源氏をめ給りんと

ねよ君給也
見ることまうしを給ひけむまことにさとりて恥ぢなきとよ
しくなとも 孟 さうや宮なとゝ也おほ内大臣給ひぬ大内
大臣の自分参りし給ふ細也まうりしものしも内宣八座
せめやれ見るへしとたゝりあるはそも有之
たゆらはくあるはあきひとともあはれしるゝとの給ひく八
孟 可給人とい也
あまと姫君のはなるにはすくちかしくうちにかくれとも
てあらしきかうふたまはゝへるともやまとうしはいゝらうせま
しかせとと給ふまれ八 細 雲井雁也 孟 雲居雁の也 内
大臣も此磐れてをくれぬまくてあさんとおもひしつ
夕霧もへたゝるをとをまふしてはち情とのみ也は
うしかくせましハむのやうにんくにゆかしうせんとて

にとや
くも井さらるゝを見給ふはかしこまうらきこゆるくくあらに
あり君を 細 夕霧のみもあらし給てゆるし給ふとや
おほくをも給ふることくちうれ 孟 源の心にれどもき給ふく
内大臣のまよけても夕霧に雲井雁のことを思ひ給ひとや
久さひ給ひんふうきつハまくるやうにそてをきもひあはせに
哢 とりなしくの給ふらのんや
男をさかゆるこれかつ見をあそ給ふ給へうちよしくちんとう
くお内しめてくもて来ること 孟 夕霧のかくまらるゝとハんつくきる
まの給ふぬとや
ゆかりをあくかるくにもひとなとうと給へるお内大臣もはとまつり
宰相の君めてハひるゝしる給へるやとまうちうすあのひと
女をとき給くそして給へるはかし 花 内のおとゝもさひとゝなけ

ぬしは雲の名乃法にも人ゆかとこそ思ほゆる歌也　細同
はつかしく八月の法にとらうつきれ　宗　源氏常なる歌也
さやかなりすれ給ふなるさつきころにとらへしきこゆる
てはさしてあやさとりまへるなりくひきのをも給ひそう
ちやうきてる法らしのかと　さやう　宗　ちへさぬさて
ゐる也
いとあらくちかくきはらねといとわりしきもこえつきる
中　宗　ことらしくあきれとや
人く物のうへろなよりかへつうちゆきとなしはゆかとも
物とらへ給は　宗　女房なまるとも本ておうしろあるとり
ひるはなししあるさ歟也
あやさとあのし給ふるにあにくわとなく見ん河をも給へるま
こ給ふたまりくはしつきあつめるとおやれ法めみ　六

とういくしきのこ見ゆ　宗　内蔵乃おとゝろうさんやそであう
し給あり
うらねハふさめ安ゆるものとちるとらのとおもふるれきさ歟り
てを物はとのこまかなるへきとちらく法かうて　宗　物宗
人るとしてさやうにてねハあるわきあれとや
細　ありちきまてねるとはつさむるるとや　法　きうちりの
秋のつさめしうあへねハ物そ宇けのこさみそまける
あやし虫女ハ男を常にくはいひしてまゐるさあるんちまんす
くる人さんやよくうちきてさ歟まかてあしあるちるすれ
ちとちまり　細　とつやんとはくへし
法りとていとはりしくみるあて　宗　うしろきさん堅固（ケンゴ）友
永男つきとはまるうしきとや
あやうれなきしにようこめんはくうをてうろんとみへし

抄 一本かうらんとあり不動(ふどう)尊は除しきて 箋 今まさんは
行人なとの不動乃陀羅(だら)尼(に)よみ印(ゐん)なとむすひくなるか
やうにかたくなしきくちつきなるを女のさ様にて
不似合との内府乃詞也
うつの人にもおもはれもさこそ拙くて今まうしくると常た
うきゆうかくてもんなくて心から引くしきハけしぬことさをり
細 況生の人まても流しむかハかるやうちなるをいつハり人ちう
なるをとうしとも 箋 さのミに隔(へだ)けましきひとなると
のたまふや
おほきおとゝハれたなりしの姫君なりけり給ふなるをしくんも
よろひのてにみかまりしなをしめて 細 此君の姫君也
箋 右はなかんなん兼(き)葛(りやう)とのいと也 伊勢物語なともむさなりきや
は乃面白也

とくしきゆつとはゆしきとくしきおほめくてとともあつ
しきゆるてうにてそをさて給ふなれ 花 きとくしきさハ
ふ及(きふ)也 色不及(ぎう)なると中庸(よう)の処ともなる也 細 行なる
とおほめくしきなりなると也 箋 此もせは又入もせさ
らんとす給へとし姫君は源氏なとし入給ふとも内府詞也
あなふさもあるかなれとんとしあんなともさるわさなりと
箋 さうさんひなかしん八とんこの所乃そのよしくれなからあ
る物なれも生活のはさうなる物乃そもん乃さてすれハ
必ず是は入なすひく成りひそとも打ひつて給ひかさ様あら
むうしきは此君乃姫君のなる也 いつふ源氏のさ様しくまと
しきそんと物かほとも生活のあひて給けきあら
葉八かなる也
かそてあるとひくかくへくさせけるものなれハあひつて給さ様あ

らんかし　花　人のかくるゝにハ必まことに人ありけくなしとしも
この君乃ひとゝなりて宮仕へにいだしたて給はんのちの
さこそいとゆかしくおもはるゝとの給ひく　この君　細　姫君乃
御事也
行末やうに見まほしく思ひしはおちハ　細　雲井雁
うちむかひくの給也　花　舞姫ハ雲居雁のかはせとの給也
たゞかやうに姫君にある海をなれと心ありて人のたくらへれあらはしきし
あらしなきんとおもん　細　夕霧此事故あ宮人のみあるとハ
思ひさしけるも　宗　内にハ雲井雁などとてふり女御后
になしと思ひしを夕霧なれどもいふとのん也
人乃うへのほどちかくあるをとゆかしとにおもひしられ侍り　宗　源の
警せとなとてえ申し給ざとさく夜毎に内府乃思乱るゝ也
人乃かくれ給ひしも心ろくも　花　人のうへを見んとて思ひあるゝを

も給はんことはいかゞあるべき也　細　夕霧はさる也今はさすがに人をとかくは
いまだのハかなひ給ひさず也　宗　女人のむかしをうらんとて男ハ
たゞあるをと思給はんことはいかゞ思ひはかりてえ申あるとまうて
まいることもあるまじき也さりぬれバ人よりまさりてあるべき
給はんとも也　内府の雲井雁へ御返の詞也人し
人の給はせしとにて志あらんしあるにひと給ひぞ　河　宣旨
給ふことどもさのみものはなしにおぼしてハ社の森とあらはしあ
さるを待つるとわがとおもひつゝ申しはべる
宗　内府のおぼしみ子の御有様とも也
昔ハ何事をもあらす思ひしてゆくかたもなくあかねをいひて
かゝしことわさむ紀ことも惜かへ見ぬにもなからあるまじと
いふそおもひつるにもとかくありて心見しうしろめたき
花　雲井雁乃心也　細　昔ハ何事わすれぬあさましきさまに含

ちんなうしろもなるまてへしもろ〳〵しきこと也　案いとまな
うらし付たる何事も思ふ念もて申しにけしあてるまてもそ夕
霧と我とをなひをまいとわしうしゝさなれは面られ
なくてかなしも見るしはとてこひ出るれもとゆくうるを
てなつかしきこと也
大宮さるとも常に世をかるれてとゞこし見む〳〵給へと
此
雲井雁のまへ御給へと内府のひさめ給まくも大宮を
えや入給はぬ如へし　案うち宮なるとも雲井雁のう
とくしてたるとし御給へと清出なれ也
かくの給へつもりたてえやうなるを見んまゝ給ひは　細
后乃かくの給へる也　案内府のゆうにいさめ給うなかる　内大
しさは大宮へとも清にあれとも世給ハ何をもかう物よもん
のせくすやとこひ給をもんなるしきはなりてうちかなる給

御なとも也
ねよくこそはかれのたへのしとむめ出をとつれせん　細　とは思也御下
とは見乃さすとりしも　案内府の詞也
さうしくれむなしくてきそくそう見なとてなつかしそくらん
をひをとりなるくしなきものなるはしまかりかくてこゝをさ
られなをことにうしはくなれんあるなもへのひかけあるをと
給へし女御乃清のなるをとにうしうらまそ　案大中将のまと
め出るなり也こそてとも也
たりこそとこれのまためにてんへのかとくさえあるはそはひ出を
もとれる　案あうつらさ丈をもあるなうさとの心也
かゝちろさかふ中なるをにやいはるるとおほしこめ女御の来
まゝの人来りせん見んたる中なるとハあへもしてなる女
房なるをしてはくまはわひまし〳〵いさも行なく御給ハまゝ

かうさんへくれしとくさきみはなからへりをたちも給そふて
宝 内府気色ことハつまさきに見えさせ給ふなるへしハつさ
ことのかやうにいひなしはあれとよろしうま給ふるあ
しかの内府のしん也
ゆるすまなしやうなりかりもらしひつ中なし給　弄　よろしぬと過
女御乃事　細　まことでんの女御也
なをとかりとさてとのかみてまんかん　細　女御の渡世蒼也
弄　女御の夜世蒼也なをとかりとさてもハ弥かうたうことのかは
ゆゑゆんとくせ江見乃るまとの給へり
中将なとのいとにあくさ給ふんそはとにまへはとかう
にくそハ待しめ　細　柳本なとのかくハ可然人なかるへきと
おりひ給しまたるもあるやいかなるを嫉へしはりちも
かんまくく女御ハ出給也　弄　頭中将の兼てく中人の義人

みてあくんたとくさひしにみ給ひてたゝひあかはな
なれハすやさ海てのことゝもあしゝと女御ハさひ給ふとも
かくの給ひさうくをとこしあるくおほさるゝにうるへハうて
やらしきさすやとたうしきに出かゝ給　花　内のおとゝこれなり
くのうかうひさうくを女御のきこえ給へくとくしあるへ
見おほゆくるすハさてきゝくへの秋身かゝかいちるこ
ほとかんあるくちかかくてあるなとさうやくはとの給にそ
るゝかゆるのへきしきれ女御の給也　細　かやう
しきとみるとうくにの給ゆへにくやうしうそ給
るゝとこゝろさうとも　花　有る説ハ
弄　みるくのをに見をとゝくにまてあへつひ給に女御
のまふれよのうやうしくそうしくも給也
此御方有給ハこまうにおうしあさいかすくてりとあそてみまとも

あるかのまうしきさ梅をひく事なしうき梅の花のひ
らきは思し ある御ほうも御ほうそ詠りかかり思ひたく
色に給ふてそ人まちてとあり事る也見え侍り給ふ
花 弘徽殿女御の方にちかきをい也仍さ何しきれ梅花
をみるや也 細 女御也 栄 女御乃方へと内府の梅
花はさきとへて殊御何く見へしきさ梅は御め給
ふなるへし
中将のひとさうへとふるうれ花とをとのまよくなりさん中の也
中将也 花 柳ある中将のふさうしとかへもかくさ
細 悪ともなくて それ花をも都にしあるとも
内大臣女御へ申出る詞也 柳本八才一の端子なれと
きと悪なくてむかへとりあるや出てさかへとふかつれ
とかへり中将なるとのまなく思ひ給きんと存詞也

うきをかるまと
いと物しきなる人の見ん御ほうされ 栄 あふみの君をもとかしき也
やうて これ持つるのをとゆるされ候かくすき物して
細 以後つくりあふミの君乃持まへたちより給也
のそき給へハ 栄 内府女御の後ハあふミの君のちか給也
をもられたくむとをもやて 此 花よるをなやかちくちゝる
御也あふミの君のちか出さ也 栄 あふミの君のちかしちく
御今よの給へかさよふしへなとのん放へし
ゐせちの見と思てされあるわくへの付る也 細 あふミの君のさと
のはひ給へや 弘 ゆるまるし
もく給くとそうち給ひてとつとせちにとまるてせう
さいくとも思ふて思そいとえてこるやあるうすてと御かへり
て涼しくの人乃されをつ給も 弄 なとしまるて也へあるそ

のさいとうるてもてなせるや　細　此段まて皆物語の詞
こゝやせうさいくやハちいさき目をとゞむるやあひて丸塞(キ)
をとゞめてもてなせるや　河方　こゝのめれこゝはおしはかる云
こまさいはかりきりもくろくのさん
てうさせり行てあるとつまとのはそめ大なるうるをはうし
のあさはひさるを見ハ来経　案　内裏のさきまをひそ
とてよそてあきさきさん経様やき(キ)人ハ廊(ラウ)はさひ
よさきうき経すも先んをやうや
これんもちさ気色をまる　細　五節の義也
法度しやくと　細　大国とうつすやあひくの五節ら法さ
案　又は見ハ小国とうひ行人えそのうち大国と五節を
とうと記てうちてさむとさうや
とうと記てとみもうちそは　河　久なるやうれ弥也

あの木ハひハ筋やきさん　弄　細　河　引あ同
河　されたれ中にとひハ筋なあとうちうるとなさ
いと河さしあるはさとしちう　案　こゝうとちなれ様也
かうちハ記ちくれ　案　下(ゲス)主ちう紀様也　細　一統泥(デイ)土ちう
ちうなや下もくしきや
さ河れあハさやうつきある河さしてうきう記うしく
案　さゆくしきささ海也
清きうろをあるを　河　色去れ善悪乃周よるまてと生
の容(ヨウ)貌(ハウ)乃好(カウ)醜(シウ)河うく端(タン)正悪厚中来なるとやそう
河きえなを河見なうちなとさすられあくうねハ清き
うろきをあるやうける色一統様ちきん深さ人ハ羅(ラ)帯(タイ)も
さおや此見ん浅き河さちるゆへにつきあさきをちる
とうなう　花　河海又二乃意をうさされ待り後の一統を

にお留し侍り 細 河海抄之遺とも可然經於中一の
よろしきさまや 箋 今は見侍しておろかならぬさまをいへり
物いひのしとちやかなる也 箋 ひと言いひ乃よくききたる也 河同
不忠乃あまりさきに立てあらはれるにあやうきとなりて
ようとは忠あれと 河 何ともしくしきや 箋 右とにかく
とし経ても江見乃さ度ちかるへし
まとへとあるうまへくも何くきて 細 我身ことも他にあらぬ
有と内大臣れと経也 箋 兼子にて八年とあるへ
小屋くちあやうく他経つるとの内府乃人也
かくこに思あるをとらまし経よりともなくせんつきなし
箋 内府のくらんなむくひ経見よおもくは見乃うきすひ
経家なとや
かくて物し経はつきあくうあくしくるとやある

細 家は立のそこら経也をくるき内大臣ちかくいひし侍ての
羽なら 箋 あらはしるところてはうるくしくんとも
あとさけくのを何りてとまひまうてをやとの経へは
細 関白なれは随ともあれとも 箋 天下をとるひ経んを
いふり
進はのしとさきとすくかくて何かく姫は家よの物おもひろ
待らんとしとろおもりかくゆうしくとひきとくさもし
けくはつひまえ見んかまくぬえるをてそ 細 よはえの羽
てらぬんちし待れとかの経を 河 四重五逆
んまとあれん見要あるとにてとうちてんをとふんや
まうこ何らんは人まとあろへきえ一統双六の打負
あれた物とるを常にのんかまくねは双六のうれまうさ
ぬんちしてんかまくしまとまえ 箋 河海の後乃一統

志かる人をさすや　細　河海抄にくはしくみえたりとありよき
ものとうちいてさいめくものなる也　宗　前にも双六をうち給
ふさまうれ侍るにめいたるありこ給に双六乃目もうれ
ぬつとくうれしきかなしひなきりし父とものまくにみえまう
ぬかんかましきかなや
きれみよちかく侍りくをもおさくちかれよさゆう手にても
よんなるしなきんとうるそてハことひしかとえさしもある
ましきことなりかなと　細　内大臣の詞　宗　内府乃心也
内ちかくを近江君を侍りしんなとく兼てくハことりしらる給ふ
なと云義妙人なれたるにも妙まかしきかなや
なをくれはわうまうりへてそのかおもふ所をもそのかうれ
ちまうしらひかくへの心もてとそもめともえうるのくましもとそ
めぬ給ふなれて人をまてうるへのあれそ真に人といふれ人の心をまとて

めみのひとのとしもくらきえにうるれハおやもえしくうかれ
おまそてふをとするそくひおほかあり　細　たくらちの人よ
てはしきてそとも内府乃詞也はるかなさの人そて
大まれとともくのめ子とも云く給とも云まいハへうれ
人のまうとく云とうてはしうれを親乃まてなをと
かたまり
まして此その給ひはしはる法々しさきれてつゝしきもとみん
志きまて　細　まし云めといハましてまむきてめなとくいて
んみも云ひさし給ふとも近江君を先とうめ給ハさるなも
ちまゝくそはことくしと云給へてまししひ給てうくそ
そ　河　ちうにくそれたる也　細　近江君乃詞
おもとうしめ　宗　世間でもくをもかくへぬれとの詞也
おほをうけかつと引手もはうくまつり給ちまんとかまて行へを

弄 御おほつほとりはく祠法定れんや 細 三ト前やうのるすや御おほと
やハ修太日をおほとわかくちやういの法常をおほりとお
ひとつふりとし 異 壺前同んや小便(ヤウベン)はくのことやとや
うのるきそを近江君乃清くんとや 河 尿壺ハ
え給んし給ひてうちとくひ給ひにくさうりうしぬやくる
たりかくむさうれおくるおやの 異 内前のうへ語りて笑(ワラヒ)
給也 細同
きうせんのんおしハ此物の語ふるゝをもとしのとめて少のき
給へらえ命をのひさんうしと 異 親ま孝のんおくらやむ
内前の詞やちとて念をまつめて物をの語へとや
わくめつ語つる御とくふそ侍く念そその語 弄 物くしらや
異 されかゐる御とくのんをとうり
ちさ乃がらふそ侍しめ御さなく侍しきとれてある

はやくちにてさとしく侍し 異 近江君乃詞也 舌本性(ゼツホンシヤウ)也
生つきたる舌をやすることの也 細 近江君也
めうほう寺の別当大徳のうふやに侍ける 異 妙法寺
近江君はうまれ給ひける故に此寺のこととりて
面白侯也 此お母と近江君のうふやにまいりたる故に舌も
やゝ似たりとて舌をやにほうふるにたりとてはやるを
かれたるへし
あへ物となんなけき侍たうひし 休 花 あやかり物也 肖(エイ)花物語云
よのあへ物なときこゆへき故也 弄 侍給し可然也
角時もいふとりんすや私云しなかひし 未詳 弁二十二
不及汝法花 細 あやうかるや舌とれもの乃やに来
ゐる故や侍りうとうひし侍語し也
いそこれさとさやめ侍らん先とひさちれゐるを

細 内大臣感し給ふや
いと若かれんかくはかれなることを見給ふそれあちかくいうを
んたることそはちきなかりしれくそのはしたかひくひかり
宗 そも江見の香をもきくことゝ父のつさめ給へもいふまして
やめられよと思ひては孝のんかも内府乃義かり給ふや
ともにとゝまりしもそれ大そうかりしを見ある罪をもかえへたる
うしせの給て 宗 春大徳ちん世に法花経をそしりきたる故
またも香をや嫉ともそしりたるある者の罪をは法花経云若
得為人軽賤憎嫉乃至謗斯経故
こなたかそらしくおもひける法さ由に見んとしてまんへてそれ
しかれ 宗 女郎よも江見をとゝもなまんかはさなかりしを
そのうしさとの内府乃んは嫉へし
いふはさめてうくあやしきをそひともさきそもむかへをを

らんとおほし 宗 まく史記て君也さんと楚忽にも君也
てさやしきとの内府乃んも
んくもおまきうつさいひちこさん乃せいひとし給ふ
まゐらし 宗 女郎の法をま乃人くのことをいふ
女郎乃さとにまのし給ふ時く 細 内大臣の詞
さるとさりまてんの言法さるまとも見ん事ひ給へし
宗 それ江見に女郎へ集り給へとの内府乃詞や
ちとちあるあれへもとのつらへなましらひはからくに
あれは法てもはかぬりし 宗 ゆへさちあるやうちあるを今はし
らひ給へは又可然こともあるぬそとや
はる心ちして見へしなまり給ひちまんやとの給へも 細 女郎の
法皇にまりしまひ時集り給へきうとや 宗 そのこゑ
とふして見へしやされすとや

いとうるはしきさまにて待ちきこえ給ひつゝそこともはかなき
くにゝはまへ花ちりめぐりてとこしひ給へつゝ中にもおもしろき
法ゆるしたに結ふ　細　是は紫の詞　弄　内府のくだりまでとこる
はのさまにありしきとや
ゑみところところにて是はかうまつりたまふといふとまきにけは
をさしきゝつれも　弄　是は紫の詞也
拾遺行基菩薩
法花経をわがえし事は薪こり菜つみ水くみつかへてぞえし
にたひろうと思ひしぬ　細　内大臣の心　弄　内府の曲を申す也
とは紫の上の心をさへつきさぬとや
いたく思ひさだちて　弄　その心をしみと云也　河内本ナシ
ありしかとなり　河　水原抄ニ云ハ海と云詞也　案之
さゆうにおもひたちてと云也
をさなくいひなしもしてまがひけりあるひはまん　花　提婆品云採菓

汲水拾薪設食　細　内大臣の詞なり　さとるんと宮詞を
うかへて薪拾ひ給ふにもと也
とし給へとや　弄　河へ和歌こそかよひしにまかせ給ひしにこそあや
かの物へ折よしへんのやうにはこそうけたまはりて　細　香などきとる
くりあるにとのんや
をとこたちのなかにもいとをかしとや思ひ大臣と中ゆふる中に
をいときこゆるをあなかしこもれやうれなるさま物して
細　をとこの物なとをかしと　弄　されてといひし煙僧して内
府の詞也
あはれなるもののあはれをかき　細　此内大臣なとあるの人々へたに
さかしくいひしくあいこうべくさてもとにさけるをとは紫へ
紫の上の詞はあるや
法なしきとも力くらは　弄　此段は草子の地の詞也

はそいの女御度〻まうのぼり給へるを世の中〳〵は
宗 源氏の詞也
よろしきはさなどやいふらん 孫 内侍の詞 女御はかう〳〵しき
はなやかなる人なれど侍りしはさやうにてとく〳〵しくはせんとや
宗 内侍詞也 女御のよはん時と女御の心おこしとや
よろしくとく〳〵しくは女はふかきさまもとむれば色ぞ身をすてとの
頭たてく 宗 よろしくそれ程なる様しさいはずてはなかなかと
色せの内侍の詞也
こなたは頭ぬ 細 く心ひきて出侍る也 宗 内侍御返
よ記四位五位たちのいとき世そてうち見しろき程をまゐる
心あしきはいとさひらなる見むとくるとせまそいてあるめて
色のけなおやく 四位五位 細 内大臣の侍事也 宗 源氏
のんや見しろきふかく内侍の聊にはゆるかしとすくする心も

いかめしきはよさ夜との心也
ためさ事はきよさらまし 宗 内大臣の詞なるへしとの心也
はやしきこうさるる生心て事ることくの程也 宗 いまさ君か
し程のなはのこといへり
みせちはまりもとく〳〵しくはなつしまたぞなかりける 細 光へ
源氏の御をとめ給は 御修するとおもたるのそろ也 宗 源氏
の御ことめ給へるてる御親まての御んてうしまるの程よ
はひめりん親の心いふん君に思ひてられ程かくあるへき
らんせいふ也
よろしさおやのおひしつむまそくるよさを程つまし
といふもよるとるし 細 光程ときもとく〳〵しくるのくさるもよくう
はく親もまちをりて細はひぬへきや あまるとにうきは
つきる心也

まことの見えん人のことをあひえてめさまほし　細　をとこの
詞　宗　三郎なることとをかへ見乃の語詞也
夢ハよきといくちふことを業平の事をもてまそ　宗　又郎の事は
のやうに夢を合せし語らるのを江見乃詞也
けるやうあるへきはうにてあめれとたちたち語るかの中り
女ちらくあいをやうつさせて　宗　内侍の心をよくまさるをしるまる
あまたそてそみことを江見のたちくめち語る詞也
うちそ御返事あるは　宗　されたる心さもといへり
たるかなしにわりしくはとゆるされあり　宗　かくちのさ乃と
けしからぬを罪ゆる心ろくなき也
気といとむすひあやしきさまも人の中にあひひてゆくへき八わか
いふさ夜もたくまを　宗　田舎めきたる也　是よりまてハ業平
の批判乃詞也

さとあるゆめかたりとえをと云乃ことやうにまし心ありあてい
ひいてしあるは　細　在五中将ハ業平をいへりとつきそて見る人
拾　是より中将の心視をいふ也　宗　さしたることなくてハあらむと
うちさくみてこに御自に思しくぬ事の有るまとをとうる乎こ
ハ時のひつきくしたそ御り物語を　細　ことに異也
すともゐ思しても御さきまくうちまんしあるは
宗　事乃ありともさゆへや
あるにもちなりひくぬほとのおまつやハおもしろきりと見て
をとこありうし　宗　よくもまつぬ人のさくに心と耳と道
いとみあくよしけるもとひ心るまてとよういきをち
ゆくんと宮めへくもありきとけそつまひこハさ夜よの語ひ
とうまつハ　拾　是よりまてを江見乃るや　宗　えとこひたつるへきに
ことをいふことをひあすにようまて耳のもとこさむへくもと

はしきおそろしきちえつくひなきともわしあしく安
ゆゑなるとや
あらくしうことしけすてけうまうに侍るほすらひなかる絶
かそれなどころはあしひあかる侍まにおてあらいとはやし
きし　河　逐（タイ）孝経（ケウキヤウ）
捨（すて）てあつきみてやかられなかる人のさまハ其さなきへてそ物ハいかなれ
座つきぬけり　宗　三退（タイ）り積（ツミ）ちるやもや
いとうふうひなく八おしきと　宗　さとに若さとちとハ哥ちとさく
ちとくなきなるよし語ことを心り　花　孫周之
みそすしあまりせりともにゑあそぬさしきあるす　河　史記
おまうさ一同なるや
うちつくきとなし語　宗　是さハ草子九地の詞也
此て女清とのまられとの語なるをきくくなるさ侍なり

八坊しくもこそおほせよはりまうてん　宗　女清へ来れと内
府の語なと秋んまうるぬ様にせえりく心語うんなれ
えよきもと来らんとのさに宮の詞也
君とくれなさに天下に物かはと以はきくのをそきなくし給
えんかはとのつうちみは立てうるんやとの語也　弄　てん公を
可然のや世ちはさくひなく物ほとも也　細　内大臣にそあ
うはえ語とも孫のまた被たちはさしまりしてはとや
宗　秋之女心うふ内府の大切よし給ともとも女清はさらむきなる息
かれをまて是度の中ふれえあるまじとのみときに若
の語なり
語おほしろ程いとうろしろるりや　宗　草子九批判の詞也
また清文なり語　宗　女清へさに宮なりや
はしうきみまちうき程みえはかしひなうし　河古　人志事姫

とやかくとおもひまかせうまれぬともあやうしれなき
是より又の絹引なる物ゝ見えし折の皆毗之　宗　是より
細
手にふれよる女清人又の絹や　葦(アシ)墻(カキ)とハまちかきをいふ
むるや
いまそてかきをあむるとれ志るしを待ちぬハあさきその実とや
ちくへいさきを結つんとなん
河姑
立より八新也むすびをされとあきその開を結つきへ弟也
寛平法つ流らしあふさきを結ての法清かくりまのを
人をきりかつうを紀てちかうもよしと世紹ハ折りされハ小八
系の法見仏のよめつ言也　あひ見るくハおりて常をもやに
おもへしあるそ乃実またひよちくき本　宗ハきをむ程を
くちかへとも系わかかとれ時又ハあの子その実をとすへ
給のやとや

かこされハあなかしこや隠れかしこやと　花　おそれかまつりを
まてとりみんやたちくゆるたるとくともせハおそれかまし
きとや　宗　卑下如へし
てんかちかく　花　法海かへまつるなれハまし田をめやとしき
かきたるされとをと紫去行(ニョウ)第(ニーヤウサウ)の字まよりて二六書也
路かうる細也　假名(カナ)ハ草(サウ)乃字の楷草なる細やかなるそ
去と去字の文字まおしもとも筆ありつとくしき
をてんかちかる也いふへしト乃細よいと成らかにかる
まろての己かもちとも見くしれとあまたるをも法れ
おるをてんかちかる所といひて見待り　宗　てんをきろ
ましき法るとにかちゆる様也
かくはなさしやく重ねつとまつりまんと也かを結へたるを
宗
又のかくにきゐるや

いとふかくゆかしやらてやく　宗　此引哥の心にてあはれなるべし
(拾遺) みくさのゐますたの池の狩ぬるはどいふへきにあらすや
はやしきを見ぬせ川なとゝて　旨　あしきてと見ぬよりきゝ
ゆきみるきも川の瀬々の数あまたれとも　花　よし
あしきものとする也　宗　数あまたあれともよくきこえ侍へきと也
又ちしにかくそ　宗　又のちしにしめ給ふあるよの詞也
草ワクミ道ちか海のかくされゆくてあはひ見ん田子のうら浪
(細) そはに見えみおしまさと始らト下とくのそよぬ哥也枝見ゆよ
うちぬあせと見へんへきなる也万葉には夏ん本なるそと云類也
たゝかくされいくあはひ見んとかんそあ斗や　細　まと
もちふきとしゆくかや出来田の名を絵ときちるや
(花古) さくらのあ田子の浦泊りて夜日ハあれそこ見そとし夜日まてあ
かの本絵ハゆりてあひ見んの七字にあり大事か九神を

もとろるまとらひはしねさるべし　万葉にいへん本なる
の歌乃拚と申へきにや　旨　蜻蛉日記に石山にまいり
てかへるとてゆくさきを見ぬといふ所を見やりて
宇治川の水とあをききしひとりさねる　旨　みわし
此もの大川乃への夏深れなきに掛れて八代の底のめやさ
(花) 大河のへと大河水と詠さくへきかうや又他の縁かは
まゐや可愛き古さ然るあるれたあるにとらぬ也
いかゝん成へし　細　指図川のへと聞くいふや　宗　女流を
たすねみえぬとひなしぬとの引歌也
いとさうらににれるて乃ち此をもちるも見としにかくよ
ひきさうさぬさし　宗　此詞(相)ようてたてまぬへく見ゆらと旨
ゆゑに八あさ子の地乃詞なるべし
志もしあかにゆりうくゆへハあのかるとの外と　宗　それ

をよろしぬはさるべし

えしさ侍まもちひくさとまねてうつくしきを　河と代

とある中人なとの消息ハ袖かきをゆかめて云るか　河

ゆすりや凡俗の手なれ共中古ハ假名消息とかきとみ

るに書ゆかめてうつ事多きめり

うちとけつゝさすかにいとほそくちいさやうにすれたれハ

て　細隨分と云義也　宋　子に見の文を隨分と云あらはの

らは紙と清済しき侍るべし

まあしこれ花はつきと侍　河　文をとへ紙の末乃花はつく

なりや帷てあそきさ書てしともとあてし　この花は付さ

紙を田舎にする事を多文かるかしこ乃茶に…と

たるも

ひとましほしへしとひとあられてさらなをたてるひ侍まへ

やとありあると女御の仰らるゝ九大きんにはゆらりてこれ第

せ給へとりふさとも仰へるとてさるゝ九ちへはけつる

給はらんとありありとてはかくをうかひにたへ乃見ととふ

ありてさかりとて記させさせくは給へせさん女御ゆへたして

うちとうとを給へるとや中納言なきてひちくはかりとひて

ひさまうしらせん　細　下女や　河　げ文の侍とゆうしさめ

うちうのと　宋　下衆高女やとをいってたち字や

そもくノ又内宮　宋　中納言そえてたるる侍や

いとせめうるさは文のよるうこはを侍られたとゆるしたれ

こそれと　宋　女御乃心姫へし

ならへすしへ之九かすてねハやおもんまむへ給ひてもみ

ゆるされとて給ふ　細　女御の御親也おとなをよとハ宮の御

あり女御乃御親や侍らのう夢…女御のこえなりをと

結ぬよりやはらん事をもまとすゑうちはなぬよりこゆう
きりやそて中納言よりかの帯や
清たてかくゆへくしうらそてハころしとやおもひ出とされ
んやれてくさ給へと　細　さぞや清盛するとやさればよや給
あさらまとの文乃やらにちと記さにくろひらくかるを
ハわりのひおとされんと女御の帯や
ゆかり結ふ　宗　中納言よ盛るかき給へと女性のゆかり結ひ
家はそれた清をあらくてハ御ひおとさまんとや
まそいそてあてそおしぬかきさんハ批おりらくてられうち
よしひぬ清盛ちてしハ　宗　さらすらに女性の清盛殺きれも
面よいそてつそやかる子んて悪くにもし娘とや
わしきてとのまうちにのさまつされて結あれハ少のうさを
みくきてそ　細　え盛るてとくまの御目さや中納言乃中納

宗　さては兄の清盛が西国にのかれひそかに盛るかの
うくらとや
さんしうきこめさせてハつとおりあらんとてた〻清文めさせて
かくは給ふ乃るや　宗　扨御きうさのやうみそてハおしうらん
よそてさとあらし女御乃清てうりめさせてかくとや
ちりれたる〳〵されおかれけるさハうらめしくて
細　文の銘やあらかきのとはるるとう書たり
細　扨もちうちもろうか海乃ほとりに清出よそこさに乃ものり
四ケ国をとらあるや立出よとりかを縫とやらお心不思議
乃事や　宗　女御の盛事や此事も思ん不思議の物や
それよりも不思議と一矩よりむしてとや此盛るるも波うち
出よまいとうつきうり此事れ不思議や
やうきてよるそ中のゆきハ　宗　女御へ中納言らうらろへくさう

世中ならへり
あるまてましくしたかへるをいひつゝもとかくうち
てふるもこれ物ほしきれと 細 女郎花の詞也ましくは女はうのうき
語ろうと云語にてしうらてある事と物語也
牟 女郎花の詞也書きま我ほとりしある事をとへ人のいを
すゑはせうしたるよの詞也
それはこうむ人はとさまへはかるんとてかとつらくていとし
川 細 中納言の詞也さく人のおもふへきなや 花 当事人
は女ほうのほとゝつくしけむといふ事いひまいらせても 牟 中納
言詞也それはわかとこしをいへるなれはおかしへきうて
をしはしてはかりほとや
御かたかく 牟 ふに見ゑ女ほうの後とかりをとかんと語てや
おかし此ほとかなつきや 牟 女郎花の返事西向とやふし見ゑ

乃詞也
ましとの語あるをとめて 細 此事はちゝてよとい〜る絵
たまうとたくまつて斗まうくへあるや 牟 菊済乃たと
よめる此絹乃字をまうつくし語てまうつりん雨云
とし語とや宮え此物語の経(キャウゲン)云也 弄 ふに見ゑて
うとよめるをハ月へしらでまりとはるゝをとこうら此く
此物語の経云也
ぐてあまへあるらうれまのりをとらへにくきれしめおも語へ
里 河 蜜乃ろてろハ合まの下れ此るもいあまへあると
云元 和 あさつり此るてるや 牟 やしふもあしきたる紐
為にとりすのいてあつろくハつまてかと事つうつろひ
終つ 河 粉 白氏文集 西子 菝葜 遊仙窟 紅も見女る此
氣粽也

はるかにつきくくあつかひつきたり 宋 辰にても
つきうちあけ傾き候よりぬきさきあつて周用ことも
住宅とめんの間と 細 第子地や生活狂ごなどう
けしきくしあることなどもあらんかし 宋 女法よ清 射る也の
時ハかにえたるしきこともものあらんずらんとて
ちるもてなしたる羽奴へし